

頗る懇切にして、年代順に配列せられた各通の記事を順次通讀すれば自ら楠公精忠の事歴の一般を知りうるやう意を用ひてある。因に年代順配列に關して注意せられるのは、從來普通に通元弘二年二通同時に差出されたものとせられてある金剛寺所藏十二月九日付金剛寺衆徒宛並に同三綱宛の書狀の中、後者をその花押、上所、筆致並に自署等の比較よりして前者よりも後、恐らく建武元年頃のものなるべしとの意見よりして、觀心寺藏元弘三年十月廿六日付二通の書狀の次におかれたことで、その論議の詳細は既に昨年六月發刊の同氏の「吉野朝史」の中にも述べられてあるが（同書後編第六章）、今、楠公の筆蹟全部の嚴正なる影本を前にして讀者の自由な批判に任ねられてゐるわけである。（神戸湊川神社内、大楠公六百年大祭奉養會發行、非賣）（以上柴田）

○維新前史の研究

井野邊茂雄著

吾々が史上見る幾多輝しき歴史事象なるものは、常に歴史自らの中に於ける自己發展變化の結果であつた事は今更茲に多言を要せざる所であらう。歴史は何よりも先づ其に内在する諸契機によつて流れ又歴史たり得たのである。

然し、若し吾々が實在の歴史事象に眼を注ぐならば、外的要素の働き余りにも數多く而も力強きを看取するであらう。其が齎らせる影響は素より千差萬別である。時には其は宛も當該國に質的變化を與へたかの如く、又時には單に量的一時的影響を及ぼしたに過なかつたかの如くである。

歴史自らがもつインマーマーネットな發展と外的エレメント、其何が歴史の動きに對し第一義的地位を占むるものなるやは此處では問はない。恐らくや其は全く外的要素の受容消化乃至は強制如何にかゝる問題であらうが、少くとも外的要素の歴史發展變化に對する關係は、洵に緊密にして等閑視すべからざるものあるかの様である。従つて一素より其存在する場合にのみ然か言ひ得るのであるが一國の歴史研究が外的要素の影響を度外視しては正鵠を逸するが如く、外的要素の力亦當該歴史の内在的發展への絶えざる關心なくしては考察し得られないとすれば、一國史の研究にとつては前者が、又所謂外交史研究家にあつては後者の態度要請が不可缺でなければならぬ。

而して是は今尙維新史研究者にとつて愈々特に銘記さる可きものと思はれる。何となれば一近時漸く其弊を脱しつゝあるかの如くであるが一未だもつて吾々は、斯る相互關聯的立場に立脚して論究された研鑽の成果に接する事甚だ僅少であるからである。

斯る時、先に田保橋潔氏著「近代日本外國關係史」に接して、著者自らも其總論（六頁）に於て斷つて居らるゝが如く、歐米の日本進出が吾國に及ぼせる影響に就て觸れられる事殆んどなく一此際には更に歐米列國の本質究明が必要であつた一余りにも外交史的立場立脚に終始せられたかの感を深くした吾々が、今茲に筆者言ふ所の前者的立場を持せらるゝと思考される井野邊茂雄氏著「維新前史の研究」なる大著を得るに及んで、兩著者互に其言及論說されざりしを補はれ、安政以前の日外關係研究を愈々完璧に近づ

けられしやに拜讀、斯學の爲慶賀鳴謝せざるを得ない。

「……本書は、對外策の推移變遷を釋ねることを目的とするものながら、また敢て近世外交史でなく、全般に亘る對外關係でもない。これに因つて國內の狀勢を究め、明治維新の一原因を求めやうとするのである。従つて對外上の事實たとへば歐米諸國の行動、蝦夷地の經營、國防に關する施設、對外貿易の變遷、並に日露、日英、日米に起つた各種の交渉の如き、いづれも叙述に必要な程度に止めて、それ以上に及んでゐない。……要するに本書は、予の維新史研究の一部をなすものであり、所謂鎖國時代の對外策が、より多く内に向つて働き、遂に社會改造の機運を導いた經過并に發展を叙して明治維新を語るのが其目的であり使命である。」

「對外策より考察せる維新前史の研究」なる論題の下に學位請求論文として東京帝國大學文學部に提出、審査の結果文學博士の稱號を授與されたりと聞く（史學雜誌第四十六編第五號一〇六一—一二頁）全十編四十章五百數十頁に及ぶ結構を有する力著の内容は——其詳細を上掲史學雜誌に譲り——著者が第一編「本書の目的」に於て述べられたる右の章句（二—三頁）に依て略々盡さるゝかの如くである。其惠まれたる地位と相俟つて、安政以前の對外策に關する史料を隈なく涉獵集大成、數々の新見解を提示して吾々を裨益しつゝ、是を年代的に體系付けられし氏に對し筆者は衷心畏服の念を禁じ得ない。

然し乍ら、著者が其第九編に於て「弘化嘉永時代に於ける世論……概ね非戰または開國に傾き、主戰攘夷の説は頗る振はなかつ

た（四九四頁）として「概ね攘夷論が盛んであり、海外形勢を知る僅少の識者が開國論を唱へたと説く世上の史家」の誤謬を正されんとした（五〇七頁）新説は、第十編結論劈頭に述べらるゝ「進取開國の精神を吾國開關以來の傳統的生命にして明治維新を招來せる指導精神の一大源流とさるゝ所論と相關聯して、尙早急にしか論斷し得られざる問題の數々を含むかの如くであり、又廣義の開國に伴ふ對外策並に貿易開始を重要なメルクマールとする狹義否嚴密なる意味に於ての開國に伴ふ對外策を一律に論ぜらるゝかの如き氏に對しても亦、尙若干の問題が残されてゐるかの様である。

管見に依れば、著者が新説として是正さるゝ弘化嘉永年間の非戰論開國論と雖も決して著者の所謂進取的開國精神の發露と稱す可らず、敢て然か言ふとせば洵に消極的なる其であつたに留る事、従つて進取開國の精神を絶えず吾國に貫流する傳統的精神とは容易に斷定し難く、其は寧ろ凡ての精神、意識が然る如く常に歴史に規定支配されて其時代の様相を含み示すものなる事、及び安政六年下半年以降の對外問題は、貿易開始を一大轉機として洵に質的變化とも稱す可き展開を示し、幕府、諸侯、公卿、上級武士等封建社會の上層を占むる者の微温的政治問題より、下級武士、農民、小市民をして動搖覺醒せしめたる重要な社會問題化したと愚考される。従つて吾々凡てにとつて研究の中心課題は、寧ろ常に所謂開國よりは、嚴密なる意味に於ける開國に伴ひ惹起したる複雑多様な歴史事象の研究になければならぬ。筆者茲に於て、著者益々健祥ならん事を祈ると共に、更に斯る分野の開拓に

依て吾等を啓蒙されん事を切に望むものである。(定價四圓八拾錢、中文館書店發行)〔西井〕

○樂浪 王光墓

朝鮮古蹟研究會

本書は昭和七年の秋に發掘された樂浪二古墳の調査報告であつて、これに従事された小場恒吉・樺本龜次郎兩氏の執筆に係る。

この二古墳とは貞柏里に存する第二百二十七號木槲墳即ち樂浪郡の椽であつた王光の墓と、南井里の第一百十九號石槲墳とを指すのである。

王光の墓は幸にも盜掘の厄を免れたので、その結果幾多の新事實を明かにし得て、漢代文物の知見を一層豊富ならむる點が尠らずあつたのである。今その内容に就いて二三の特記すべき點を紹介するならば、先づ封土の構成と埋葬の次第に關して精密な考慮がはられた點であらう。王光の墓に於ても、墳丘が岡陵を利用して、四角張つた形の土饅頭形を示して居る點では、舊來のものに比較して別に異例を示して居る譯ではないが、封土の構成に際して、附近のものと同じ土質が使用されて居る以外に、他所から堅き粘土が運搬されて、これを成層狀に使用して、封土の崩解を防止して居ることが今度新らしく注意されたのである。猶又死者の埋葬が二回に亘つて行はれたことを知ると共に、第二次の埋葬に於て擴穴の四壁が殆ど垂直に掘り下げられ、後に再び黄色粘土を以つて埋められてゐることが明瞭となつた。棺槨の構造も亦別に例外を示しては居ないが、その用材に就いて棺には檜を、槨には檜

を使用したことも知られた。次に出土の遺物に就いて見れば、その質量に於ては玉肝の臺や彩饅塚に對して遜色を有するのではあるが、舊來知られてゐなかつた高杯や弩臂が發見され後者の使用法の實際に就て一道の光明を與へこの他筆頭物の存在も認められ、蒙古索果淖爾出土の所謂居延の筆と稱するものと同じく東漢時代の筆の實物が兩僻遠の地に於て發見された點が異常な興味を惹く。或は従來糊斗と稱せられてゐたものが奩の中から出て、女子の化粧刷子であることが明白となり、又箭頭と稱されて居たものに就ても、蓋椽釜金具であることが確められたのである。此の他、王光の墓名の由つて來る二顆の黄楊材の木印が出土し、一顆には一面に大守掾王光之印、他面に臣光の繆篆を刻し、一顆には王光私印の四字が刻されて居る。これにより、この墳墓が樂浪郡の一屬官たる王光夫妻の墓であることが認められ、又婦人に就ても漆器の銘文から姓を番氏と稱し、その骨格から三十代で没したことまで論證されたのである。

南井里の石槲墳は既に盜掘を経たものであつて、その上半は破壊し遺物も大半を失つて居る爲、表面上若干の興味を減殺する嫌ひはあるが、その槨室の構造上、樂浪古墳に於て舊來類例を見ない石窆構造である點から、學術的研究に於て前者と同様な價值を持つて居る。即ちその墓制の系統に於ては當代盛行の塼築墳に屬するものではあるが、築成後漆喰を使用した點に於て高句麗古墳との類似が考へられ、この點から又後者の先驅をなすものたることが推定される。墓墳の作成年代に關しては副葬品にこれ明示す